

<連携モデルケース 2>

主訴：発達障害

小5のB男は、3歳児健診で興味関心の狭さを指摘され、幼稚園入園後は特定の遊びや物にこだわる様子が見られました。母親も後追いや人見知りをしないB男の子育てに悩みを抱いており、市の療育相談に何度か通っていました。その際担当者からは「個性と捉えて様子を見ていきましょう。」と言われ、見守ってきました。

小学校に入学後は場にそぐわない発言やマイペースで集団行動から遅れてしまうことが目立ちました。けれどもベテランの担任が、B男のペースを尊重しながら、学習活動等に参加できるように手助けをしてくれました。また周りの児童にもうまく働きかけてくれたので、B男は「面白い子」として級友から受け入れられていました。

しかし3年次にクラス替えがあり、担任も代わり、B男は級友から「変わった子」と捉えられ、からかいの対象になっていき、少しずつ学校への行きしぶりが見られるようになりました。

5年では、登校しても教室には入れなくなり、保健室で過ごすことが多くなりました。

第1段階

学校と保護者のつながり

保護者が養護教諭に相談
養護教諭と保護者の関係づくり
養護教諭は病院を紹介

5年生になり教室に入れなくなっても、B男は学校での出来事を家で話さないため、母親も何が原因か分からず対応に困っていました。

学校を休むことを勧めてもかたくなに登校しようとするB男。学校では保健室で過ごすことが多いため、担任より養護教諭の方がB男との関係が取れていました。母親も何度か保健室を訪ね、養護教諭と話をするうち養護教諭を信頼するようになりました。

小さい頃の子育ての悩みから、現在の状態までを話す中で、養護教諭から発達障害についての話が出されました。母親の中でも少しは意識し始めていたことだったため、養護教諭に紹介された病院を受診することにしました。



子どもに障害があることを認めたくない気持ちは誰もが持ちやすいものです。学校側から発達障害の可能性について話をすることは、保護者との信頼関係が取れていないと、関係を悪化させることとなりますので慎重さが求められます。

第2段階 病院と保護者のつながり

保護者が病院を受診
医師が子サポを紹介
保護者が子サポへ申込み

養護教諭から紹介された児童精神科の病院を受診したところ、B男は「アスペルガー症候群」と診断を受けました。母親にとって診断がついたことのショックよりも、これまでの子育ての大変さが自分のせいではなかったということが分かり、何だかホッとした気がしました。また医師から、教室に入れなくなっているのは、障害によるものというより、二次障害を起こしているためとの説明を受けました。クラスの一員として受け入れられていた低学年時と比べ、級友からのからかい等を受けるようになった高学年。B男の自己肯定感は下がり、教室に自分の居場所を見つけられなくなっているのではないか、という内容でした。

そして、本人の自信を取り戻し、自己肯定感を引き上げるために子サポでの相談を勧められました。

母親は、医師の紹介で子サポへの来所申込みをし、相談を開始しました。相談の中で、医師と子サポが連絡を取り合うことを母親は希望しました。そこで親担当は、B男本人の来所前に医師と電話で連絡を取り、B男の二次障害の状態について話を伺い、子サポに求められている役割を確認しました。

第3段階 保護者・本人と子サポのつながり

母親・B男の相談開始
病院との連携
学校との連携（関係者会議）へ

B男の来所に当たり、子サポの親担当者は、養護教諭からB男本人に子サポに行くことのメリットを伝えてもらいました。また子サポの子担当にはB男の好きなアニメの話をおいておいたことで、スムーズに相談がスタートできました。

当初、B男は学校の話をしませんでした。子担当は焦らずに、卓球等の遊びを通してB男との関係づくりを図っていきました。その中で、B男は子担当に受け入れられている安心感を持てるようになり、少しずつ学校の話をするようになりました。

母親も親担当と相談するうちに、B男自身のつらさに気付けるようになりました。そこで、本人が学校でもっと楽に過ごせる方法について話したところ、母親も希望したので、学校側に子サポとの連携をお願いしてもらうことにしました。後日、養護教諭から子サポに連絡が入り、来所して関係者会議を開くことになりました。



連携成功のポイント

- その1 学校と保護者の関係維持
- その2 各機関の役割分担
- その3 学年や校種をまたがる際の丁寧な引継ぎ